

ハウスで茶摘み

4月上旬から中旬にかけてビニールハウスで栽培した新茶の初摘みが行われました。

人間市の高野茶実夫さんは、近隣の茶農家で構成される「東金子茶業会」のメンバーらと1時間ほどかけて新芽約180^キを摘み取りました。

また、日高市で吉野道隆さんが経営する「狭山茶吉野園」では、朝早くから家族ら8人で10^キ～12^キほど伸びた新芽を1つ1つ丁寧に手で摘み取りました。

高野さんは「新型コロナウイルスの感染が広がる中、例年通りに初摘みができて良かった。新茶を楽しみにしている人に、いち早く届けたい」と安堵の表情で話し、吉野さんは「今は自宅にいる時間が増えているが、新茶を飲んでお茶の健康パワーを体に取り入れ、毎日を健やかに過ごしてほしい」と話しました。

収穫した新茶は、各農園の自宅店舗販売をはじめ、通信販売などでも販売しています。



乗用型摘採機で初摘みをする高野さん



手摘みをする吉野さん[㊦]と家族

タケノコ出荷最盛期!



タケノコを手にする加藤さん[㊦]とテレビ埼玉の平川沙英アナウンサー

日高市で春の味覚、タケノコの収穫が始まりました。

今年は暖冬の影響で、例年より10日ほど早い3月下旬から収穫を開始。同市の加藤千太郎さんは、竹林の中で芽を出したタケノコを探し、鎌を使って収穫しました。タケノコは大きいもので高さ30^キ、重さ3^キにもなるとのこと。加藤さんは「今年のタケノコは大きくて収穫量も多い。軟らかくて味も美味しいタケノコが期待できる」と笑顔で話しました。

収穫の際にはマスコミ各社が取材に訪れ、管内の魅力を広く伝えました。

露地で初茶摘み



初摘みを行う主婦ら

人間市の「平塚園」は4月中旬、同市下藤沢の茶畑で露地栽培の新茶の初摘みを行いました。広さ約25^アの茶畑では近所の主婦ら約25人が集まり、10^キほどに伸びた新芽約150^キを手で丁寧に摘み取りました。

同園の平塚尚吾さんによると、露地栽培としては県内で一番早いとのこと。初摘みの一番茶は早速加工され、同園店舗やインターネットなどで販売しています。

平塚さんは「味、香りともに上出来。新型コロナウイルスの影響で在宅時間が増えていると思うので、新茶を味わいながらリラックスして過してほしい」と話しました。

カントリーエレベーターで 水稲種子温湯消毒



温湯消毒を行うJA職員

JAは川越、北部、東部の各カントリーエレベーターで2020年産米の温湯種子消毒を行いました。「彩のきずな」「コシヒカリ」「彩のかがやき」など合わせて約22^ト消毒しました。

温湯種子消毒は、種子を60度の湯に10分間浸す消毒方法で、環境への配慮や農薬費用の削減といった効果が期待できます。JAは、組合員への支援を目的に無償で実施し、今年で6年目。JA販売推進課の担当者は「水稲栽培のスタートとなる大事な作業。生産者とJAと一緒に取組み、美味しい米作りを目指したい」と意気込みました。

いるま野アグリが 水稲種子の鉄コーティング作業



鉄コーティング作業を行ういるま野アグリ職員

JAいるま野の子会社、いるま野アグリはJA管内の主力米「彩のきずな」の種子の鉄コーティング作業を行いました。

生産者の作業負担軽減や遊休農地解消のための農作業受託事業などを行う同社では、4年前から鉄コーティング作業に取り組んでいます。今年度は、昨年度よりも多い計420^キ（約11^ア分）の作業受託がありました。

同社の細田和宏課長は「直播栽培の技術を普及させることで、農業経営の拡大にもつながるよう生産者を支援していきたい」と話しました。